芭蕉翁行脚怪談 人

へ 13
2881
3 4

芭蕉翁行脚怪談

人

へ 5
1.97
3 山

ヘ 15
2881
3

一筑行脚僧後第六

筑後備前者の方より長門周防城へ鎮て
中国城主国なし、未だ其国の者を受けて図分
剥て肥前の小倉より出て丈不同国に依て其の
城下に至り宿浮し之ても儒者の方に数日
逗留なし、服之筑国依頼に於て謝議一統
此居城上りて之度当所も古立と肥後国
城溝へて筑前に至り同国元孫より之くる村に

斎藤文庫

是躰になれハ秋の始つかたいまだしく
暑気さへわたりしかれど堪て村に於て
是の暑気堪かね日も西の方にうつむき
しられば今日暑もうすれぬとつゐ
しれ共未膳もなりして秋月の城下
至りしなれどもいかなれハ是城中にて
なんと中にも稼人今朝秋月
致す諸人となりくに変して甘木に

甚早く南割合秋月城下までハ七里
なり今日既ニ未の刻頃迄にては甘木
迄の道なれハ程なく秋月の
至り一里ニ余の小佐川といふ川にかゝる
在橋のうへにて稼人毎朝なきま変た為
在年比ハ夜に入る佐川上といふ
これハ男も橋の上に在て川下の
方城のかたの名所おもしけに何ら

言ハ笑ふことのおちぶれもとしも一度
衣に付郁分に及ば雅ふあらはこそのも
いふべく諸人の通行の邪魔になる俗人
城して林月へ至り捨りてかなはず大の
変化に随ひ治りぬしもとられバ芭蕉翁
高中根を変化ハ人百年のらなきもの飛や
と定不首至中根に出てかゝる謂
好のゝ蕉て人中々の面れわれバ云

芭蕉翁是城笑て中々家ハ衣のこの
諸りの毎く活りしかんがりん家の化生
亀なる風り秋いふもしかは及べされ
出も雅家家の道城芸の俳道簽
自の及に風しめまさハ互化生の為り
怪しきつのかはし香る城の人て是城
きゝさり是見神城も風ありしも家
の及おりしもしや是小の変化に従て

あやしや何事なるらんが有べき我俳諧城連
ふるも挑灯の一張城世をよそに翁に居る
有りきうし今宵これ此の小佐川
盆りなれば笑し挑灯城にて例の変化
城をかまへ待得しと申されば草も是城
ゆふべの旅人の如く変化念城にて梅
ろひおきんば翁のきいかん通り給ふ
多くなんぞ申されたる芭蕉翁たの草を嫌

東国に連れ小佐川に世をすみ竹の草を
やらかしねらば松原にて申しぬ是から野辺
城に番所とやらん小佐川に出て待受け日も
暮れかかるに変化の出でぬもふしぎ
夜の宿もあり我来るは是から俳名を申出ぬ
旅人もし変化城より出で候へば又
此方に向ひて待たれぬかと捕れたる
よろしく心付けられよと申して草の

まて我かあゆかり芭蕉を草堂の
庭へこ植の世右野辺にも庵そみゆ
ところ〳〵に合蔵し三格到りの川有て
西南に古橋掛り渡せし芭蕉庵
こゝを小佐川たりとかの古橋の中に
と川の絆を見わたせり古年経
けふも今はた野辺にて川暮に芦の類
の竹茂り水の流れ静かなれども猶深

事なし城郭にあらず人家にはなれず遠からずされど
さき見物静かにして空は秋の夕暮
寂かにも哀れの筆に書出したのこれ芦の
中に破れ損ぜし捨小船の乞しかぞ
枯芙の中に佛しや捨小舟
と吟じて夏化の蛍か侍居てありしも
福たりし昔れおいさよひに其の別れも
成しにこゝに今年七月写して月まで不の

に小萩こたちくさの川上の芦生茂りし中
より青き色の玉さえかかなしまる
咸文年中より立の日よりまさにまさしかわらぬ
さとる福なしき梅のよごとに花菅にて
より三百程の命ひとへに一村の櫻とぞ
なりてまさせりけり長寿のほまれと
更にし太の刑に幻のごとく一人の男
にふまされゆゑり花菅出でたる化生武者

よかきことへものしつんで長男身には
白き衣数枚着しまの髪ながらにて
面の色青ざめて太郎を摩やくちゅうる
見ゆる新も左手川下方へにまかるの
の衣ゆ見え風にいとも如きなることに
出でて川下へ向様き良の如き茂
城上への古草へ向して急ぐと海さや
去り出刑へ一身し漏る流れけだ

たちまちに河下に流れて形を消し
まりくゆきしれずなりぬ世の
あはれともいへるの事となり天下
され共其男の行末をしらずなりぬ
このくはしき事をしるものなし
見物せしかの男いかなる事
なるかなとてなげかれけるよし
なりけるのちにこそあらはれけれ

とかくのことにはげしく荒涼ともけう
ぞかし夏も見るかひなくにして子細
ありて有事もかの様男の宮
中へ参りて宮に海又
形の姿にて庭中にて橋の上
事をおもひなげきける事
いかなるもせてなげきの悦を
見ての事もいのあはれなるのそし

伺ひとかくまきこの男が是被心花筵
の事被志けしと見へ侍りしが伺被給ふ
しゝ流し音て中仙被をゆき所生有け
此世の人こそ酒しきそゆへもなし
くま路ふ今の事蔵事ヽ何被の外たまひ
此世りしの如く此世の陽人にはす
めんとの陰人なり我この則ヘ毎夜ゆふ
それのふ所記りををなけま正之ゆいら承八

一里も林月の撥下の河人会者と申せし
こそ此ひしが若き年月の頭りをも承しの
妻とこそ陰くなし人負被志のぬくゆのひ
のあのひふ二世契ての妻ひや被護き
年庚の事文なりしがそれも林月に
あつてこゝ毎のひふ持ち命きし事文もほし
又びにし毎人申し合て立のきしに阿世
より有つ手をつかくりあかくなば此来に

於て大坪の者に取こめられ既に縄
をかけ恥をうけんとしける所の市王なる
者にて大きに立腹なし某が川
と云右の女は川下へ流しまかり候
不届のものなりとて安へ諫せ子かけ
事にて免じく頼まれ一命を免しけり
其後悉よりして児を残悉く殺を家
まで打擲まで来たりたる事なしまひまいらせ

志やうにちかひ我に其川
下へ行て逢見んとて行
あれは我身の人なりと云あまりなき我
身をすてて思ひやりの人なりむやむやなり
こころの中の思ひの罪やましのこころ
様なれ共一命を取らんと思ひて待
胸の中のしたに思ふ廿六日のこと
既に毎夜川下の女を志

人の情は水の如し川下へ流れ行くは女
の身のみかは今世ばかりならず前世に取持候はゞ
男は男とあらそひて悪ことなれどもしよ
きけば吉人と悪敷さつき見え花菱に
是は殊に恋の念は愛着の念はあるき
さられて本来の得いなして是はしう
しか給ひし海の子なりと申す教訓なくて
さればこそ花菱は何しけかの

化生は是にて中にも海の底の龍
なりて川下へ流るゝ女に悪からぬぞ
欣ふことは死せし男のよきは不來
海りもしろきことは水中に有龍に海
女にする事も出女は死後の女悪
き男有ら男のうへ変は為たより
とのふみがまへにも念のある事の
陰事はなしに海は是も念の海き

書おきて正しく人々の為にはず
すさまじく鬼障の争ひたるがごとくの如く
其後人々何しても屋の女太の女に見えく
しまくしてみへもしてく風にしなまず
志やもかてまいし海なきし且非業
の死なれやうげこをしくらかまゝちる左
あり我人命は性を見合はせて更に
海りかくの如くの上を覚しかし能
たしく悲しもなくもなく悪き合を
祝るかへして本来未いに尋ふ志をし
我ら数年功をと後にし離合の利
にて身をおびたるがに観念城女が
観念を合集さしめん上は帰る事に
川の上は川下やほのとも
堂の中にしはれを花蓮が数刑に果る
如く依なし且而太のねらし中やり

一の男と見くらへしハ一ツの青玉と化し
たるもの川下へ玉と成と記しく
又川下にも青玉十數ヶの玉合集
して又たる前きては又一ツもあせまさり
亀く大事數度有りし二寸の繪つき
合てたるもの守之兆志けり爲と
きもの見ひ有り千度將しつると
之大変悦しき事なきぬハなきけり

天清い云ひ右の百子と志つりと
語り明し夜となりハ変して変化出
出く中と成る鑿を數を舟にこの方へ行つる
何の怪異もなうそ不思議なり

前行勝悦後第七

古へる京一り塚の事
伴六一句にて道拙定也

附　青楼の変化伝

前編拂煙談第七

古てふ京一里塚の怪異

花蕪といふ女が籠屋林月の埒下にあり
古すみに遊田して長壁の辞城個有
西城下より遊道一面にてやしまが西剣
城立ちより高度稲葉東連寺が海て

赤篠後より入出て久西来にて出城下に
於て遊屋の下より附けられば花蕪
西丹といへる遊人の方にて数日逗留して
我遊屋の雑城河より出て西舟の来
まさ屋の分屋経て西遊後より出まて
面をえひてかうは花蕪城久しく
歩く人などして寿城のかもしとり
た花蕪といへ茶でなごり居処出を

何ぞや御事さて三ヶ月逮夜して毎月に
此頃情越一礼して甚度当棟木城
立おはす古馬に乗りて御所へ毎りしが
此原田方八田細かりて人々がなげきなれ
それより徘徊の料ありしやさ蔵りて白昼に
いと大分に通る人もなしたゞ紙をもの備へ
毎月刑に花蓮が臨より若く此建て者にて
有様かりの是非此人々のみ筆頭八九才の女

の子いとやさしきさまの手さへのやうなり指して
ありしが花蓮よ此母へ参り申さむおもてなさるる
出家の花蓮を思ひけるに此原に住みける子
人家紙さへ書かれけれ枕にてさまざまの事にしき
野辺城本事々いと細かりの女の子の連
あかず人もなきに是に来て来て我は時
事々に心得さう旅人かなしみかなしび給ひ
程の斯く我妻人此野辺城宿こ添

誠乃んそたゝこの花の露ふこの身ハかりて化
ゑ身の弟子志つうしこの根に人付とまさ化
をこ不事もいつる海にられた何の城を
中出来や菩薩人も別になれさりて
中達磨とあちくと唱え我事ら
見人きこえ初かなるれ世の子孫が只人り
何の為に此則へ来るまて海みなんだまさまさく
梵程よの教たし且海を我こハ何の

用いのるやと堂人ま我の女の子菩て
中紙教ハ左紙の君これ云の身ト食て
菩薩さま下新中を事とハない故
我が文ふ此先人三谷村し中和の子の
東天竺中者とハ起もあさま乱く
何年かくま此梁城た田下さ遊
くし東そてさも乃人事してりく風
梁城をして蘆葉に渡し給れた

苞蓮と申は是は□□先生の後母成
継母は我が海が母に後をぞなれし家
きりの□よ義なりしをなかりし幼少
こしして又母の宅にて居る處に継母は
なさしして我が形をも事をかり心ならず
世にしてありけりつゝある有るなれどもた
ず孫ぬすみ今おしへ一志もかはれきれだ
別我が當前にてけし善て行苞蓮とて

是ほどまで是もてくるる事なれど流
のれあらきをかれども壺未ばらくしてん
届は□ぬ中母の詞なれ共何の善もなく
まま継しきまでの事よくも候なる事
びろうきにても一志にかはらず海の位の紙
見ても其連て行度□そのことなり紙
小母ものに海共本く毎の事世に丸
その可行しかや娘にててやさまのまま

あらそひなき見なりしかども、つゐに花若殿よく
以後ばかりされしかども、右の家の領智なる人の恋の
任ひしそもかゝる所に咲くらんは是も
可りし善きあはれなし、竹一村有りし中
にこもれ深く住むなり。見えいろの便をまで
かれが子ども、あはれなるはかなき竹の年月の
すゝ城母さる事に言伝へて後は下つりしと
羽もまつてあはれに風のやさしき姿

さるまゝにもちり花若殿の名を真似の野の
城なしいつまでかそてもかいの外りと
いふ家の三若村城の若村ね、むかしをあらつとう
あはれなる城城あり。外に手紙ひし則
かの又城をも人の出る三若村の中を
いふ傍の同村の兄弟到此家
城立て人の家の若三若村とて中市々之
花若殿又申すやうつゐに百姓にはまゐらぬ

ハ大の志ん事なりとやハ名海城天條と
いハれて有徳なる百姓なれハ何の足
なくさきもなくしてあそびありきなりしと
聞くもなく芭蕉翁の家に至り見
るに其能大造にて其家人を相大概
なりける様子にて内にも百姓の器
しけり芭蕉に出事内ゆかしさるにて
對面しなきほと云ハれハあそびて為

是故也その身八まで見るも長人の
事なしハ何事なりやと芭蕉被
庄蔵にも語る程に入て二人位やよ
芭蕉ニハ清りぬれハ我未だ熟
冨士川の岸なりしが此跡の野辺に
居りけれハ年ハ八九才の頃ならん
女の子捨られしがふとりくの事
やまれ此何りなく三吉村我父なりとて

中着の才覚に依て下々まで形れしと
語りし後一村立の竹の筆にて済矣
せし此身の番細に語りてうの浦りを
出して毎にいうふんまつが女房是がらう
うかれたりしかるに又なかりし其後
兩親も皆も能く是非申女房を對
すすめ給ふ數刻の間にまて文婦かれ
一ひとかたりてまた事しける前年地の八

先夫の母の子我が娘の元夫にてはせ
二子は我は其人の娘をば持きたりしが
地の生れ村中にも名のある
孫人か勝れ今年の秋に出家が盛
古智者にて一村にて是まで奉公人に
いかなる事をかの今日とやや先月
初ての縁のはしが廿人の野辺で夫婦
の此みやうの娘連れ歴々に集り如

娘といふ者百日ごとに此鞠をもて三々
乃も先んずに挺ひ居る計なれば其の
有様なるの母き娘何ゆへ今の恥を知らぬ
心ならぬ此海の里なれば抑なんとなく然らば
姿のおも懐く事ゆくなし我家に更に婦を
去らもいふずいかさまれにしくとも経
如何なる何事へんゑいしかや服し
一時にも及ばしうへ今更夫の所あしきかれ

扨て娘の娘のふたつなく今日もろきちと
ふうき諸方の辞なれば心定なり
親は見て却て思ひますも及ばぬなり
何事ことも悪き心をいふのみならず是非
もいふさられぬ少しも者になく候へしが
夫婦を日夜わすげざる苦みに堪ず
のんびりとすれば生来の者みな捨てて
仏事をしなりけり今日娘の命日

にあまりし如くは清経の如く百万なる
の仕業なりかかりし程に我身々
のなお猶こそ甘瀬我子を悲しみまとひ
我子の死骸太の野辺へ出し
尋ね出し荒野にいかに見捨て父母への形を
かの旅人に告げしこれより旅人に今宵
は一夜の宿りて娘が面影を一念の念仏
[illegible]

かの野辺へ至りて世に交りて娘の白骨を
とりあつかひ香花念仏申して
聞きて有難く申されば花蓮にあまた
有難き仏の教別涙を流しくれ
我子二十年は仏の御名を唱へ
よくは花蓮にも生まれ夫婦
中将門の其子古馬[illegible]
うけてこゝの七月の一周忌の祭

太郎かの老たかれ是とぞかせし。み
骸骨ことしく無慙の体にぞなれ
しを見て涙ぬくみて是の骨弟に一ツのかひ
こ川にうなくりて肉骨なまきれたこと女をさそ
兼をこ拾ひとも元美比剣に我住とつけ
やうやうひろひ河に流れ石を拾ひ
菩提寺にて法華経を一字車教智者
三字を石に書写し両文字の供養にし

一ツの石碑を立てて花葉をそなへ
あまねく思ひ侍りき追善をもとりの石
碑に文付
かつこる桜やの春の一り塚
此かつこるといくるゝ拾七月に女の子死
やしえて家二十年の内に此あるとかする
うや是まる一里塚としくるしかも承継
道に有との事なれは此石碑も後てる

継して添書もなし一里塚の如く
なりしとの心ばへより名附けけるとも
義れなり書中にて此撰を若木集年中
是とも古き句ハ翁の如く今ハ不許しぬべし
つまり随に云伝へ江戸にて俳諧古馬
の事花盛一百句ありけり一里塚
の事とつゞけれ右の道法とも云伝へり

許六一句にて居城定む
附
青柳が京糀の花風

許六ハいつも云郷人なり生国ハ近江の
そのうへの膳所に住居せり許六下屋
敷有て奥方加[illegible]庵に越して同木
まつの京に此青柳の京もいつくもをしき里に

方の東にして末は會津の富士
見ゆる北は西南は野の川より
南との境は海原にして浄土の華の
道路遥かにして日も西山にかくれぬ
二夜ばかりの旅寝はかなきひかりの
東の中に武蔵下りも重ねて御寺多く
や今道のまじわる日の名を西に行くや
雲の上の夫婦にて身をかく捨てつきやし

道のほとりに難波の浄土の
あまたや北に寺を建てし上
野道なまめく旅程のあはれ筆のはだ
かげかたぶくまで雨に下る
しもなきさへ時雨も
くるくる程にて所築きし寺の根
一勝手中の左手よりゆかしき
朝の仏の寺有れば程なくまゐりて

寺西・三千院

寺西なる道も右へ洛北ちの端
と一字源し梅月坂記とき衆々号
照月も明らかりして黎明なり大ゆくの
しるべ結衣きさまでよろこび正道
反坂巫経て本道おちり是併衣が
こゝやしきふかつ了じ心経をつめて
白昨し西峯坂くしかまさら時左

修行の紙なの行事一のくさ足が成
の如くなりし悲之梅併衣て復廻道
比黒きて西より此峯坂律くの野宝人言
て中抵は書の東し中八幡より
慢抵積復人坂まかし備りて従り
三道りたけ抵の就なりま利して
りの抵坂よう玉ときの多り足ゆて
まけありいしより三縁房ま再月三読て

かの事へ参る番頭なる者さおほせられ飛脚
いかしきけるまでくれ様へよりも人に候
おもむ付ほとひかやうに見ゆる事
まことのつねの人おもはぬ利をおもふ
ざる侍ちかおもふてはべんしつや

孝行佛性論 八

孝ハ善の本也とし孝者ハ道の始

經典ハ事教論中ニ佛經こそ論
中ニ述て御名に流有して此文孝
の心人と成てこそ道なり悟なれとの
教へ人ニ及ぶらん七ツ内の心人ハ未來成佛
有りつゝや侍さへ〳〵さへ有しが
至て有徳なりける老人なりし故人も
いはるゝ百せけんに草を建て侍ぬるが
身のこ流轉のうちに後の世自分ハ

継たまひて八孔乗をおさめて日夜
歴しやうの時代を春日の明神
たまへる奥なきとあらん中にたね
の稚児師匠教孝といふ者ありこの
でうたんぞれを見給ひ振るまひ
酒飯をもちひて毎年やしなひ
童女を殺さるゝ他へ候へきやう
小数をあつめ夜中はひいで奥へおもむきしが

原に出て酒呑童子の通り路しかれば又酒呑
城出し法人なりそかれ他の所へ
まで二十歳後明けしりて帰りにいふ童子
一人いたく酒を呑醉挑みいふ有る
本城門まで待の事かなへ速き
きぬ枝としてふみいれなどして
原そうまで候てつる乾きて志のいたす
かくうつくしき衣装をまつらへて

かけ自分にも勝る人にもまさる
訓に文春は見る人悦ぶつかず拵まを
体に拵へ秀にも吹重ねてみにた
文春科おもむき月城美人して見
勢みさせいつかは悦ぶつかず拵補にハ何う
志して廣くも風情なる文春
んかう過事に見ゆ記方城月今数に其の
東の方にまさいハ皆とも人とも城納ず文

何事の東とも空にも文事事にも大事
の数も何にす見ゆる月まて根の数のこ
おひ去り利謀に夜にいかにして月多は
おさ風雲に夜なり文春といたして
海風庵規道も納まされば出る雲
くりきさの字の明見て見て千種も
出の方に大の事なかはそのこの人言
文春見る秋に今は夜になりして

両東大名これまでかの太の日影ゆかば定めて
今かならずしんかの新へ行て今香月公命
してよく日ごと来りて子孫迄道灌もしとて
平氏の倫しを太田が家のとくしこ小路合
身ご膳してる家東井过豊のとくし
屋かめかは一刺を謹元家とのも
ういさ家や太田がへんへ承太田が根は八年せ
くいたけり碌のきしを宿を海卒あて

実にも滅しき佛之なる春八ちまきとし
よく日城あてらし高太田がのゝ小立て来
円城てこふ円方半年のゝ文の焼のゝ史
屋さしきが立出家太春一夜の宿
城かりけめしき東城しく小焼落てか松
正ん曰前てきき半こ切云は刑まて惟边
ヨしてん今か家をもちなれ何さきば万極も
ぬ角をし雄さんれともくるしかくしけ

呂后は一夜がうちに給ひ下といふ女
安寿是が為野辺にて捨る自害
たる事はこれも有無事なり
一夜さへ何かきや給ひ御前の前にて是
ありきし則ち上はの臥附焼けて藤
赤角の嘆きなるまでに何か是を地にて
中夜まで与え毎ぞりの杜会也何
会ひの何ともなし是こそもと申す

其多城日々に人々の首なり安寿
ありて和らぎ給ひ捨てれ人々を生れ
から藤原もかくもかくも参らずに給ふ
猶いさみいつしてこの根のその城食
や風毎さびしく中風焼けてへ
此不知毎に気を参りてしてかき
こもなし藤人も是城こそ知れ
いつ明日暮に至るまで食やつ捨てける

御しりて剣太刀のむすび城傍に付などぞ
なる寿いろしみきる城こそわたす女ひしらず
ためあふ道てみるて寛かよ夜深なれども
倚足をつるに婉別の一下る入なる一かの
夜の枕城枕より足城して夜城
明らし給へ在人の通りなき夜
見る迹もなしとも無て此の君に出ん
なる寿枕ころうらんとせしかの名の枕

みて思ひ付いろしく夜加加あ逢ふ
　はあ逢う京に足あ逢ひ所や
　あ逢ふと国男加足逢ふ夜加なり
一かの家に長京後しらして陳萬ず
君つかゆるまた京の事なるの足に
思ひかへしてかへる様人おやか
ゆる此所に女郎なり此付に候るまよ此
始乃ち石の枕城などんじ大きな姫

不如法にして様人の律にそむく衣の
清白をさゆて前にし様人縫て申して
是は日夜の寝ときしき衣なは
おのが身にはかしくのきのこしく着く
のたまふ語十善九年九月二日始経元
破戒なりしき雪は体にしますり行の王女森
てに体をもちひ名のおふ法信
なりしかハ自分なりまつ経まて食まて児

母たる家をはなれ法に一まん経の悪
きつ経をまもりてかしこの心と難有なしぐく
じゆいつてよまするふ律のほうらず
児女まて佛經のまま雑をかづてに江ハ
うつりとおもくの經文なり
るめりしく智慧をてる付ての物より
毎ら経らんぞりいよいよ児女ハくるまち
ますちり悪なる元にし吾心にま家まで

覚ふらせて佛果ゆかに侵かてつひ
たゝの草はすむかたしらくかくるまゆめし
けれはさんの枕かきにて南を北を倒の
焼もたゝの骨女の形ありたえさのみ
天しやうほど男の形を大手引る形を
はちりし至る面寿南をは思ひありして
明けの名城さしのそきて男の形をみ
石田思儀や大手の屋をしき焼の

すゞ我等の女房大年寄の男女を不
白髪の衣をきぬのことくはうの
おひ出面皺よみかへりて腰まで
黒の如くにかへりやうし熊の
ことく毛生ひし腕はきしのことくて
額に角生ひし指はさ男を取り
生しきんの首をさへなりけり
屋のて側へ行寄り腕はぬきさり

おてまへにのこしき日記を包に　秘すや
くしくさまをかしてこ給ふ
有根あそ給しき事に年月
有寿思ふ根我何侍りてかなる
僧都の御事一方ならず此御事
年の寿命のうれしき御宮もさせ
ゑさくこそなかなかしくも有寿
事ニ妻子の破きこそなれ願

ぬる事出何国とも定めず旅にさまよひ
にて鬼界女房で参らる事をきこしめし
にして浦ふ有寿者は追付まつりけるさして
有寿何ひしなきかたに有寿ら様
ええ参りてさまくにいや事えさひざ
耳さえに兒女ちけぬ妻子ゆめのはて
きりつもまの事しきなりしまるこ
いさ悪しきにけも袱包をしけるさいにて

見るに似たるかつら花を一さかりしてなほな
かりそれは春きさしの名ひとりして物やら
ひとの変る身へしけれしけるにつるに涙
見るよき世の飛花落葉さかしと名ひとすれ枕
みせしは隠家の春をそれの名ひとつ
浦やいふちらちの景色を世のならはし
隠ちの夜ひとつは定まれる法人のかれ
ぬしかしれる夕ぐれまへて夢枕の終る
やの我を枕として夜の其ほど
の名れ花をなりて手に此の思ひ出
名ひとつの一生ひとつにしまゆ先の人
春ある題として
春雨や枕もとまで隠居本
とにかくに在る身の行く末の春
夏ともなれば身の夜すがらもの思ひ
しげりてしも見ゆる気なりしとかの人

荒薩埵修験の杖にて雷を吉
夫文武士は我劔をさき刀にまもりを心とし
人のくにの見日本国の武者修行者は是
武士の其名を知る者はかくのごとし
名僧智識の佛経の教修力によって
なにがしの家を現はす居なり請給
祈りして悪魔を祓ふ事も萬のためん
念ニハ性城をまもりて人を佛法の力

歳ゝ是非とて不給りくぬまどれ花蕉
も自然此継道殿御紀ゆとろゝめ見之
五条中堂友伐被召返後回國に
源り一の波殿出家有りまた分保豫に
入道杉にとゝり日本唐僧としてひな
この比城下ハ桂子継尼法師もしかし
花蕉も同町何事ありて速あるり
たちしかる同ありしのつ人成ぬて比称て

年月成わくり比及出雲城の城主松善よ
三郎氏浦蔵なりしかる継ぎの尼殿
このゝ縁ひしゝ比家をせ殿として継
人御下小おもりしせん又なきも何もりし
得諸文云ゝ為にのしことそきて殿しさなれ
言いはかしく侯殿んで花蕉
城月あ海と移手のかゝる花蕉すまたる
明日乃ハまてしして三郎殿へ御覧

なし臘月にゆきみちる事都て毎夜
亥猪夜酒に来りて寿る
歳日なる中にもいふ白の事なりしが
此ときの雪表は殿の庭に降りけり
草木にことに有りしは白砂のいさゝか露の度
此頃なりし花蓮子の絵ひを見て
生花この花かしこく今此雪ぞいまだ
きりしきた手をとり今我清しゆへ一気肉に

此雪の十二日城はさしやなきも御座
たゞりし此文は海文にて事有る海に
の花蓮堂蓮葉
まで是一盃の肴に十二日城
てまへ我の在度日に

初雪や門に橋あり夕間暮
朝ごとやかれ雪ぞ酒の味

雪霰ふの発句をまむきとし
こ我さへんかわれしときこゆてくこと雪
雪積や和らか恵人やまれの山家
霽言やも見はしかし出ずやふりの雪
朝て起もや雪みか家まちす候
忠たえの雪見んやらんの帰りろ
散友耕まかすろ雪を洗良の里
活や志来室深しうや雪の舞

初雪や宿に見ぬれのきさき付
行枕の友や出ず氣しき雪の暮
と卯辰名しりぬ今新度貴方歳人
え花莚始そて歌しらうや三度
又唯あやふ風荒の見えかし出させ宿
冬はく見えしして一しもの根ふかぬす
蛛をちまいをくや風に巻く食
と附あり弁彼に桜井といふめて

高漆竹中にしん垣の様
とゝのへて花蓮池汀の辺に臨
加様物好すゑていとおもしろく候と
之右十二ヶの題の句合に書述
の織表は緞の二屏風に左右附れし
之より宸翰之御真蹟なりとて尤依
猶被のさく様の句さえり

着所勝使法之
時は千夏の天晴りしも甚角剣しく の
さいつて御書の方へ相あらしく奥ゐ
所方敷居の漆とも利紙通りかふ所の
侍の古館はりにて建ても侍の同細の着
沼なる人小さき鹿にも陣に従有早速
致し可被仰付候の頃さ 有り銘打下
に見るも御れなかに 女中衆をくり晩紀

これ錦に似たる事なり其角が永池に
作なりし蝶をてうけいの狭衣よく
術にて風情を加へたるべき此の作のうつし侍
事甚しく甚しき所とやがていかうにてこそ
発句の貴くなりて
唐の[illegible]に八つ橋しけり杜若
と口すさみに去る池のかきつばたにて
侍りしに思はる何方より杜若

なし筆洗ニ八なるも見へしき 女
哥中に白きと相日しきさの紙を池の
いかなるかの杜若の所をいづくまで
書きしられさる侍りしを侍へ添州に
知しのまことなるは 矢せらの利 其角
百兵衛なる事有之ひと是讃の作の
その為にも何なる者書さん其為に
ともそれる侍所州に所の本とてとて

年古りし百姓雑肴不揃池の上成
田畑へ出ん其前に是しるしとて人々成しりと
剣持のかくいふ中に女の百姓によらぬ事
中にも娘ハ我楽と武力の者成るに田畑有るを
伴当へ殺す道をも知り池の為に是ぞ身を
杜若のかい咲みさかりを旅人に知らす所多く
の帳ならば見くさりしをも大いの母の事をは語り
子供にても性花より外の者は恥かしき事なれば

咲余さに一つ中にも古ひのれし紅しける
さすが古池にかく目出度事に咲し事こそ不
思義の了一のれ思ひ合せ候ふつまり
中にも故玉ずし農土持の女へ孫趣なりや
ことさら候にかの姥てやしき態
取付きし事によなく候得共性花を付
いと哀なる物語しれなの人々をむかしと
為れへ語数すし也の系図性翁名二里余に

島田とやらいふ若き者の町の福者とて彦四
やの何某とやら町人一人の娘を持て其名を姑
菊とよびしが娘二八の比より是を見そめしが年
ふかく美しからぬ程に上又母もいふてきかれ
し粉文太の娘の見れなきなる事の同
訓の同し有徳の其方へ合せんと
世の人よし父母ハ粉もてきかれの始り御（とば）
迷ふる事をいふひかへてきたるのまゝ

しても叶はず四紙道すがら同訓會津の家
中行わけれども人の家の屋敷を
と申人いふ歳申やら自分と申家に
紙屋に（のぞき）かくれ其親を申てまかせ
その者の屋敷をつまでて羽を出の羽出立
（一殺一）の羽をかはして君とまかせ
その心にて羽を出し玉れ訓太の島田の
みれる様子の事ならずは訓にかくれ

しふ日も夕陽にかたむきしまゝ織田
やゝき宿やかて立しか比丘尼
友人見返る道より下居る所にて重て若衆
のみぬるとせねは宗半一夜の宿に度
俄に庭にはいでゝ座をまうけ観音経を
よみかけゝどくしもはつれは其の夜も
夕舟ゐるのそく織田やゝ表座満に移りて
手まいらかみ佛経などとくしもなし

けり平生のかくの御身くるまれは言主に付
今西の後人は三十四五の人下は十六七の人
なりしかとしもかくれは佛経有難く
結縁まことを只皆同の者妻娘も
是をきゝて寔に志深しきゝ人の有れ
ころより御尋ね歳人かなたの事のぞき
見え難む一人は三十四五の男顔とくしも
わすれゐに十三ものゝなれなる様の難の

梁松丹のやんきんへ毎に有ける母をあひ
せうりしが娘を見とは見え給はじと俤く
かやうに鬼心なし人知らぬ悪の始め
小さき川こしらへ両親の前我まして
甚藉なるあきて風を仮如意縁
みや有きへ西山をきて了わ親南も
なう我る石へ渡りても歴るゆゑ姿
使ふ事もちていかでやあらせむし娘子

拒恋しきとこのほか人も今存娘の
君和知れば所ふ居も出来は何まへの
出ると猿夜をつゝし此事なるまで
ふても語し何年かの人成らて縁事と
思ひ案し幻るで所えことへ承我親を
こゝに面て祐きゝ中ゑ死さふる大川へしき
事ずまゝわぬしゝ我身の仰せの者かさ
やう母有てとぞそて見ゆれば我か心

のたまひもなりさきにまいりて三方にはさ
承りし上盾今年つも御有せし百人
の日十六七の西方にむかつて手を合拝
佛になりし後に弥陀の名号を唱へ
いやましに拝みし心をあはせ奉る
あはひこうがんまなりきれども大の様
今は明朝まで其のもとにて
やとも我よりいふ寒やも我手をと

今年月の内にて人をあらはさんとて
我まかすなと悟る心なれば王と申しける
告給なりて三方我まいや承りて大
父母につくし今は我がものなりと
此の道今年月の内に告げましと
思ひ入拝みしは紙にぞ申しける
若きは西方のすれる事をあらはす
有り衣月いまし上の今年にいたる

此神の仏道の例なれども付
おもんはかりし心中乗の時我まへ出し
眼前に知られ平生にも何しれずして常
相つゞきし心の及ぶ所にて此夜をおもかげ
志ゝ上人の御ことばもいやしき下まで行人
修行せし所の方の人々の家ゝに承り御か
雑ならはことさらしばらくされども
定まらぬ所の難義をも上人の御心のまゝおはします

一つなきりつゝ其の伝承すれはいや心えず
いまだおもはれたり何事もなくして今宵の人
目出度思ひおもはる事は成就やかて申給へる
定めし先さまにても思ひよらずとはいへ今は御歎きり
の行方承り事は実否にも定めし龍尾の比寺
然し通ひ承る定めなかりわざくしさ候へと然
戻ありし今更年来二世の為めにも成りぬなれ
もしや中に定めし給ふ佛たる者に相遇

入の中あ出家なまて様預しくて差にも郷ず
ようさふたとのこひやせしらおら娘にうたて
が佃はぬみの院のかぎりなし絶ていふき
紀りやこしそやすへのてすりと里すなうき親現
而ものよう見ひのてめけ城去のやようにうだみ
深し女きたつぞいい紀請文娘の酒通
城返るさ兵あ親の目城志のびあ
様人の一ト宮へ主すりんまうつまこの男ハ

前後知らず寝入て床しゆいうすくさる人り
云付も居らず那さいしおこうそだてハ是
こしそさんいきんと床のゆう挑ばけへ主り
文成古方に取親中といへバ床の中様り
くうず不思議挑るうちに見ゑや見えるる
はや家の人なりさいての子深用といふみ
うたいつみ承れば家の一人り娘の
うまえてハ毎文取親とやしハ外の筆

みもなく娘の事仮にも御縁や
きこえさせ母の人々祥のさ奉りぬ
やるせなき思ひの恋衣ならさりけれは
きのみ妨きる母上の悩むに所なれにつや
娘事能くの忍ひひきし京に
の内にても詳しく忍ぶ心もなく
太の此牙城法師一年ぶきこえ候
一面らくられなれにし和州なき清事に

けこしと袖の内にかの玉簾さらぬ恋出て
涙きられすて履き御踊帰中給ニハ我とも
いの旅ゆりこれもおも我等は左根なる者に
けつれは我も世道に云我事にのきしき
あ原にしき菊水てハ我ものとらきしは
さりなからニ年も今まてに牙城捨
僧法師と成へきの屋敷なりして
相果へきん所なのきかハかやう成事ハ

詳をつくしけれは太の次にハ夫
娘の男君の秘事なりとられけれは此義母
於てもこゝろに及ハずなりとて母ゝめでも
所存よりもこそ是非めゝめさりとてハ
此心依りとのきもりなく私ミうちれかども
彼ゆかりぬ由つたへ越りとうせける自
戻しやせいへたる殿ゆつて意そし
うたるちかたしき庄越えなり

娘にかくせ語りられけれはいかゞの事に
君とのこゝろかへつて思ひハゝや悔けり
此上もあり有ふかひなきにて我をなりともまゝ
てみなすまゝたにくらはれによるゝとつてもさ
いとあはれき事に思ひ今さら此義父母にも
告太の様人はせゞて免人も刻織田屋
又婦に右の沙汰は津あれなる文婦
また是はせめて何事かもさし人かの娘が

事何卒様人の為なれはこそ恋に
たのむ人なれ共労貴く清く夫婦と
成人の一ト間に入り娘の手をなきし心
もしなし父母も夜後に存ずる何卒
此者に此事ゆるし給ひ上文に分
我に少ても旅付にかれんと申ゆるに
唇り神仏道徳の恵をも知らず世の
習ひを遂ぬや有まじ一命を出家

致させ屋きんぺきし申へ夫婦が同も
此人まで種なく夜明けに成りしなれど
妻へ身請も用意なしまゐらせ
蔵田屋が方なる立身の娘をまいり
早速文なぞさし心ならぬ旅に自害せし
身もいかが御門にもかまひもなき
父蔵田屋がいさくさまでに供させんなる
人かくのごとくあはれなど世に又なし何事

らむ邑し志かし我等不存にのれた
夫婦諸共娘が連れて屋へ帰ら路が
志をひ此先成里にてよろ〆く逃の付
屋へ帰こ至て重が再かさし是こて
よび物邑しと娘がそ回し前めて
路ふ存ふ村のれそり娘を酒得
の絆こて此池の涌こ入り逃すりが
父母ふ付てわかれかし是逃けす

五ヶ請て水車に出かも三年く漏らしも
娘のさきの大恩がほうしさる事
不存の儀とハ我が存邑れと雖も
存内さまな水車が父母涌く剱い
しえそ里迷も何らん何ふの為
生所のくれ邑し南無のみて仏
心念を水滅をと申婦も此池
へ身を投志川て屋のこくびと

成ハ父毎まて粗あれおいやく死られ
故もとも見ゆ得ぬ事なき人たゝ何のまゝ
流きまゐりまゐりかゝ見ても居たゞ候ひ
見へなゞりしといへり其年の夏か
武池の落ちより南ある杜若のたく
出ていの成年にても見ん事之出
しと是賀の姑葉が亡念なりしと
所の者申傳へり今もて菁語りけ

御長何ならぬ急なるか掛語りますしれしと
長まおる語りよれは其角も夜故信
しても一朝はむかしのしもゝみれども杜
若はその粉年へなくて消しゝ其角

山中ありこの名の吟や杜若

と返いた所しも一句故にまたここを度
百姓ありこの作業へ頼ずみ承

肩行肺臓破れ捨

肩江戸小路風事

付 梅若之系清のり

肩源川にて病死の事

付 門人遊善比支

肩江戸に而の事

付 梅若丸系清の支

抑も肩江国城経て京都に而二ヶ年
仲居杜生方へ至り遊芸伝授の跡
えんばのぐて又江のれに方々数日出在
し三度東海道城経て江戸隅田川
八幡丁へ而来る角箆香庵しの

乃人はみなゝの對面ありしに此度
菩提の為に板をたて卒塔婆をたてむ
け清水観音へ参詣し庵を結びたまふ
堂にて通夜し給ひ錢をすみ田川
梅若の墓へ詣けるに三月十五日なれは
長閑なる都のときしも吹風も
身にしみ渡り比ぞとあはれ
人の耳にはかぬものなれは川霧に波ぞ

生し柳の春風に枝なびかせけり
音もなくゆき人も涙をながしていとあはれ
しきりに花薄を出すみ田川を通り
ぬ本母なる方へ見て別に心なきことは
日女どものおもひも一声に念佛を唱ひ
念佛して心の内なる川錢に涙にむせふ
花薄をこそのおもひもなし悲し
こうりけるに立去りしかの昔の

両ゝ我かくして振ゆ本寺
の意にて他宗をけなし法華経の外は
此則の者をあしくして身をや滅
[illegible]さいの気をわれハなすまじき事
題目ほうに法華経の趣ハ念仏ぐく
じひあるにわたれ生中に似合たる
心得しき他宗を[illegible]あしからぬ
うるものひかりさせとかいのうへ

か様は題目とも申すは中堂同じ
目出きこそ納めなされ我人に其身を成
念佛わすれさる事の不思儀
延代を反ル事の生れての哀れの
かく念佛わすれなく候とひきかへ
わか身にて申きかせ又曰中に神
やうして法文仏法を学く大の石なる
すて我か身の如きの者何事にも我の

仏法の仏力にて浄るりの者なり是とこそ
もうしけれ然るに今我か観音ぼさ
つの御あつかりて申す申す大夫
二すかたを南無本尊薬師に絶日大念仏
仏の名をも唱へ申なり未雑をも方便て
衆生に南方世界の極楽浄土
に生まれ成され教百年経て金原之
たてまつり雑事を奉るかなはせたまへるなり

なりけり南海はいかし薄字観音菩さ
本尊寺の方伏拝のまか半成と申
浄るりを結瑠璃と申すは此女の道
うやまひ花蓮きれいの思ひ那
世界にまつ今はしめて申刹の縁ず
まこと今女刹の河をも出ず浮海のまこと
う世自にまちもさ衆生とうたう命く

もはらす陰他の我ありてしと是は
思ひ見るに大の者が胸のむねく数百年
佛法方便ながら情ならし我他の所行と
此岸に満足観する所に心のまま海
行まとに帰して有難きぞのべ事と
申せし胸がんでかんの心地に本堂
之の身を住川の浄に移て糯の

身見に行きころされし梅宮のことん
みこみも玉やのきぞても五ての
者ありと思ひ上手なつけで善を
信じ南無阿弥陀仏と一念の意にて
地なりして本母来る頃に他国の
と見ん我身にいとる揃ひし他に人を見と
きらんちらんたまかずしてん置

なさのいしもやさしくありあすここさ辛
是より目にさんまり本町ち市等
後是大念佛よの寺にて耳に刹まき
寛子にも後に思ひつけ先梅若の
塚へ結ひんもめに至もも下に桂し
柳よそなしくさうかもなく松桜紅葉
のくみむひの塚の足りに有りて見えたこ

古塚ともと思ひつれささまきとし下に桂し
柳ささ御召もなく成しぬあまき八晩なる
三辞有ほいくしみりくちなるに此所の壱
成るやとに思ひとおもひまるへ入るのを
出もなしぬ下し志のさましもさ
柳の根元におしおりしに彼のみ見え此塚
今はいる所桜あ見たしけり

茶摘りかけりしても柳を乱髪
と一ト晒して かるれ花に嫁やら緑で
其後楓子つ紙吉て本每年本堂
玉り見人るは人りの出るれ様を往に
立居くり花蓮ま其借にかくらてやふ
先別柳の下にみて河やしきわぐ
に道ひしにし紙いしかに借とし紙にて

中根に文さへて梅花んの毛まんなそにはの
東にしき西て又をらまれ流んの色太の
如くわぐすと同川舟人のほかより今
此寺門の玉現紙さるにひいかれされ
るは海しるまつき人わぐを何事の全
思ひきそめて是西悪對をなけにれるぐ
作後する親を妻紙のと中何人たれと

美濃の一ツ寺の老樹恵の元是成を
中にゆくまま信の盛に誇ひしも栄
の栄の果なしと語しも也

花蓮源川にて病死の事

附 一人逃名の一句

ほうしくあるの會見ゆる人まんの事

年をを庭前のをもしきへの如く空
之りたの子細に庭前の地より大
風なりしき時を一日もあるもり全し
もし風をふ枝て己刻の百子消
風し人まんをそろもる勝ちて揚
少より血勢ロかまり行ことの百年の
命数もあるのの今しもまてのやるち

はじめ二十日より泄痢血物かゝりの尾もれ
有りけれ三日の間にも命脈をたもちし
名のあらはれ今宵はすゑの寝覚より
芭蕉翁さしも人和の居を達と
挑く見えひかへいたいらか病の
道にも大段智も及かゝく風の
心地なりしが次第にまぢわり

下町やての名残をさしかぬ婦ひ
多くの門人を枕元に伴其のゝうちく
あやしのしもとも下にほのかにすゞしくして
天和三年十一月十二日の申の刻ハ夜半
きこえたる形より喜風書去人ことの外の
門人かに川見え迄云なしてやみ
名残をしくいふの感涙にてや我か門人と

なりゆく死後の今度てこの人たの
みなりし事これも仮初にも無道
の福楽へつる我今何をもか中ゆく
事なし然いへと一同の祝ひはた何事
我死の後城ハ返江守為康の例
義年ほろむくき給ひ是
のミ建久なりし中にて福むらん

せしが同城郭にて
義仲とこし越路の夜の夜をへて
然しかれの一日城郭にして十度同日
已ノ刻并ニ年三歳にして病死
せし建久の事なれハ三夜郭にてかみ
河きやしぐの若輩ミこしう同永年
かきこみやそ去年別 夜半古事

雉兎其角志ん嵐雪去来ら
十人ばかり小舟にて遠江へ急ぎ義仲
寺へ送りて夫々しき語りぬ花甚
死すれ憚りて仏果にまうこんと急ぎ取り
さらせ歩むとふ只中に書込

追善発句

芭蕉門人

義仲寺送葬日

氷ぬらし足もぬらさで渡る川　仏眼　秀吟

行人の往や十夜の道二筋　其角

涼しき(あらき)みさをさ枕ゆりつゝ冬かり

麻の衣も入て悲しき野べの露　僧　友寿

忘れぬ日も十夜の淡ぶり　京　去来

一声ひの一条所おとさし郭公　彦根　許六
帰風の根年ゟ見えや涼しさよ　仝　李由
なまこ蛸や嵐も秋をまとめて　大津　木節
ひや半も涼みなりや塚のくも　膳所　昌房
音なしの嵐の姿や君のしも　堅田　成秀
耳にのる蝶のむつまや夕時雨　いせ　芳之
我古い似紅明年の雪春の雛子の声　大坂　之道

色つゝの便も迷ふてれ柳　嵯峨　野明
待遠し間見ん会す時鳥　みやこ　一尼
咲そめし鳴ぶりもなかぬ燕の飛びかな　勝刕大寺　二上尼
耳底に水鶏啼くなりゑの夜　尾張　露川
なすきがたに笠ふかぶかや花尾花　去来
大門人の秋の日影なきとこ又これに思す
千度つ人の居徳利あれやとしも

二世勢多かれに延宝書写して
我ゝ庵のこのきれ人の道の白

猥田子礼　紀逸
古来庵　板義
風窓　湖十
中村庵　波之

悵沢大坂拾冊大尾　楳元兮田仕